

Title	食分野におけるフューチャー・デザインに基づく持続可能性に関する新規事業創出および消費者教育の研究
Author(s)	細見, 知広
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/96097">https://hdl.handle.net/11094/96097</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 細見 知広 )

論文題名

食分野におけるフューチャー・デザインに基づく  
持続可能性に関する新規事業創出および消費者教育の研究

## 論文内容の要旨

本論文は、食の持続可能性に関する社会課題に対して、将来世代の利得を考慮した新たな思考・意思決定の仕組みとしてフューチャー・デザインを導入し、将来社会の食の潜在ニーズ探索および新規事業提案と、持続可能な食に関する消費者教育における有効性を検証したものであり、全5章で構成した。

第1章では、世界人口の増大と気候変動の影響を踏まえ、持続可能な食の実現に向け、食の「持続可能な生産と消費」への対処の必要性を説明し、生産の主な担い手である企業には将来世代の利益を考慮した事業展開・イノベーションが重要であることを示した。また、消費活動により経済・社会・環境への影響力をもつ市民には持続可能な食の実現に対する知識獲得と行動が求められ、新規事業創出と消費者教育が喫緊の問題であるとした。その上で、フューチャー・デザインおよびその実践手法の一つとしての仮想将来世代の導入、将来可能性教育について概説し、本研究の目的を示した。

第2章では、企業による食分野のイノベーション実現に向け、2050年の将来社会の潜在ニーズを発掘するための参加型討議に仮想将来世代を導入し、その効果を検証した。その結果、フューチャー・デザインにより参加者は長期的視点、社会貢献性を獲得し、現実性にとらわれないアイデアを導く傾向を示した。また、食の潜在ニーズ探索においては、食品のみではなく、それを取り巻く環境や本来の自然な食の形態に原点回帰し、現在の技術や社会課題の延長ではない、将来社会を見据えたニーズが抽出された。食分野において新たな視点・発想を獲得し、選択肢として新たな潜在ニーズ導出を可能にする点で、フューチャー・デザインの有効性が示された。

第3章では、会社員を対象に、2040年の社会と自社の理想の姿、それを実現するため2020年に自社が着手すべき事業提案を導くための参加型討議にフューチャー・デザインを適用した。事業提案とその議論の可視化のためビジネスモデル・キャンパスを用い、提案事業に対する意思決定者の評価にはBMO法を用いた。その結果、仮想将来世代の導入により、長期的視点、社会貢献性の獲得、コストや現実性にとらわれないアイデアが導かれ、ステークホルダーの範囲、コスト構造への意識の拡張の効果が認められた。さらに、企業の意思決定者による評価では、仮想将来世代を経験した事業提案が成功可能性の高い事業として評価を受けたことが確認された。

第4章では、食に関する消費者教育として、「持続可能な食を支える食育」に焦点を当て、大学院生を対象に将来可能性教育の演習を実施しその効果を検証した。演習は、将来可能性の認知および仮想将来世代の立場で考えることを経験した上で、現在世代・仮想将来世代の両方の意見を俯瞰的な立場で評価し判断するプロセスを含み、将来可能性を考慮した意思決定を学ぶものとした。食に関する将来可能性教育により、学生は消費者・個人の視点から生産者の視点、俯瞰的な視点へと拡張し、環境配慮の意識が向上した。また、長期的な視点の強化により、伝統食を受け継ぎ伝えることの重要性認識が向上した。さらに、この教育効果には持続性があることが示唆された。

第5章では、本研究によって明らかにされたフューチャー・デザインと将来可能性教育の有効性を整理し、食分野に関する持続可能性の問題解決に対する新たなアプローチとしての応用が期待される結論を示した。また、今後の展望として、食の持続可能性にかかわる諸問題の解決に向け、本研究で取り扱った企業、市民のみならず、国や自治体の食に関わる法規制や政策立案にあたり、省庁横断的な俯瞰的視点の獲得について述べた。さらに、現在の有権者、ステークホルダーの意見に偏重せず、未来の市民や産業界の声に耳を傾けることも求められるとし、国・自治体でのフューチャー・デザインの適用とその有効性の検証が求められるとした。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 細 見 知 広 )			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教授	倉敷 哲生
	副 査	教授	上西 啓介
	副 査	教授	原 圭史郎

## 論文審査の結果の要旨

世界人口の増大と気候変動による食糧不足、食糧増産に伴う環境破壊等、世代を超えた長期的な課題が顕在化する食分野において、「持続可能な生産と消費」の重要性が増している。生産の主な担い手である企業には将来世代の利益を考慮した事業展開・イノベーションが求められ、消費活動により経済・社会・環境への影響力をもつ市民には持続可能な食の実現に対する知識獲得と行動が求められている。これらの課題について従来の将来予測や事業戦略立案手法、教育手法では、長期的・社会的な視座の欠如や不足、現在世代と将来世代の利害不一致の調整が困難である。

本論文は、食の持続可能性に関する社会課題に対して、将来世代の利得を考慮した新たな思考・意思決定の仕組みとしてフューチャー・デザインを導入し、将来社会の食の潜在ニーズ探索および新規事業提案と、持続可能な食に関する消費者教育における有効性を検討している。以下に成果を要約する。

- (1) 企業による食分野のイノベーションの方向性検討プロセスにおいて、フューチャー・デザインの考え方を取り入れ参加型討議による食分野での将来世代の潜在ニーズ探索の手法を提案し、その効果を検討している。その結果、参加者は現実性にとらわれないアイデアや長期的視点の獲得を示し、特に、時間的優位性が未来優位に分類される参加者において顕著な傾向を確認している。また、食の潜在ニーズ探索においては、仮想将来世代の導入により、食品のみではなく環境や本来の自然の食の形態といった点に原点回帰する傾向を示し、現在の技術開発や社会課題の延長ではない将来社会を見据えた潜在ニーズの抽出が可能であることを示している。食分野において新たな視点・発想を獲得し、選択肢として新たな潜在ニーズ導出を可能にする点で、フューチャー・デザインの適用が有効であることを明らかにしている。
- (2) 食分野における新規事業創出をテーマとした企業内参加型討議にフューチャー・デザインを導入し、特に、ビジネスフレームワークとしてBMCの適用による顧客価値の可視化と、BMO法による事業性・採算性の可視化を提案し、その効果を検討している。BMCを用いた結果、仮想将来世代の導入により、長期的視点や社会貢献性の獲得、コストや現実性にとらわれないアイデアが創出され、ステークホルダーの範囲やコスト構造への意識の拡張の効果を確認している。さらに、BMO法を用いた企業の意思決定者による評価においては、仮想将来世代による事業提案が現在世代と比較して成功可能性の高い事業としての高い評価を得ることを確認している。
- (3) 食に関する消費者教育として、「持続可能な食を支える食育」に焦点を当て、大学院生を対象に将来可能性教育の演習を実施しその効果を検証している。本演習により学生の視野を消費者・個人の視点から生産者の視点や俯瞰的な視点へと拡張させることが可能である。また、本教育により環境配慮の意識や、伝統食を受け継ぎ伝えることの重要性の認識が向上することを明らかにしている。さらに、演習後の追跡調査により本教育効果には持続性があり、行動変容への動機付けとしての有効性を示唆している。

以上より、本論文は食分野の持続可能性に関する課題に対してフューチャー・デザインを適用した初の研究であり、将来社会の食の潜在ニーズ探索および新規事業提案と、持続可能な食を支える食育において、その有効性を明らかにしたものである。本論文にて提案された、フューチャー・デザインに基づく将来世代のニーズ探索および新規事業提案・評価モデル、持続可能性に関する教育実践手法は、食分野はもとより、広く産業界におけるイノベーションならびに消費者教育への応用可能性と課題解決に資する価値を有している。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。